「かきのき　おやこ」

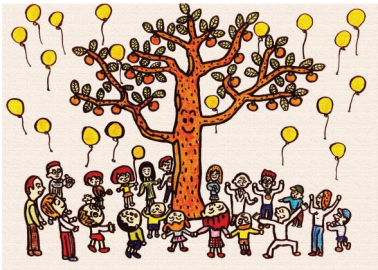
作・絵　木谷安憲（きだにあんけん）

1

長崎県のあるところに
甘くておいしい実をつける
元気な柿の木がありました。
この柿の木は
うれしそうな子供たちを
見ることが
何よりの楽しみです。

ところが
1945年の
8月9日のことです。

ピカッと光って
ドカン
と音がしたかと思うと



▲ この絵の裏に貼る

2

そこらじゅうが
火事になって
ぼうぼう　ぼうぼうと
燃えているのです。

柿の木は　恐くて恐くて
何がなんだか
分からなくなりました。

そのうちに
火事はおさまりました。

大きなやけどをした
柿の木は
もう実をつけることが
できなくなってしまいました。

▲ この絵の裏に貼る

3

何年もたったある時
木のお医者さん、
じゅもく先生がやってきました。

（じゅもく先生）
「驚きましたよ柿の木さん。
原子爆弾を受けたのに
こんなに元気じゃないですか。
あなたは平和のシンボルですよ」

（柿の木）
「とんでもありません
あの戦争のせいで
もう実がならなくなったんです
平和のシンボルどころか
もうすぐ枯れる
ただの木です」

（じゅもく先生）
「そんなことを言わないでください。
私は木のお医者さんです。
直るかどうか
分からないけど
手術してみましょう」

▲ この絵の裏に貼る

4

手術には
長い時間がかかりました。
柿の木が
原爆で受けた傷は
たいへん深かったからです。
じゅもく先生は
必死になって手当てをして
やっとのことで終わりました。

（柿の木）
「本当にありがとうございます」

じゅもく先生は
その言葉の中に
「もう二度と私のような木を
つくらないでくださいね」
という　祈りのようなものを
聞いた気がしました。

そして秋がやってきました。

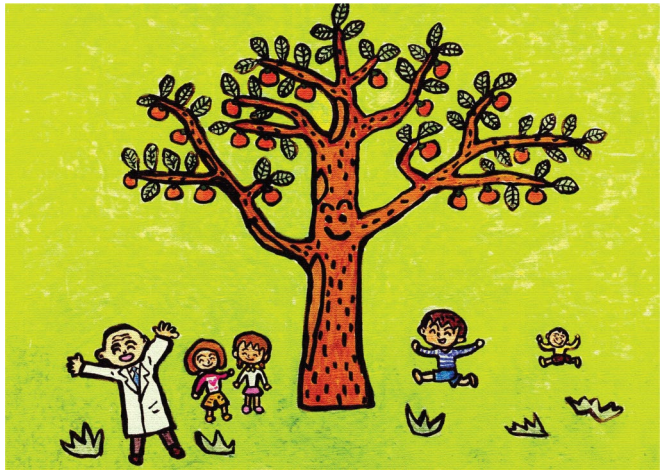
▲ この絵の裏に貼る

（じゅもく先生）
「よかった。
（間）
おいしそうな実で
いっぱいですね」

（柿の木）
「ありがとう　先生。
生きていてよかったです」

（じゅもく先生）
「大袈裟ですよ
柿の木さん。
そうだ　わたしに
あなたのこどもを
つくらせて
もらえませんか？
長崎じゅうの子どもたちに
あなたのことを
知ってもらいたいんです」

柿の木は
にっこりうなずいて
自分の種や枝を
先生にあげました。



▲ この絵の裏に貼る

6

それから　じゅもく先生は
柿の木の子どもたちを
大切に大切に育てました。

（じゅもく先生）
「元気に育て
柿の木赤ちゃん。
すくすく　すくすく
丈夫に育て」

「元気に育て
柿の木赤ちゃん
甘くて　おいしい
柿の実つけて」

原爆をうけた木の子どもたちが
大きくなる　実をつける
ということは
これまでだったら
考えられないことです。

じゅもく先生は
少し大きくなった柿の木赤ちゃんを
長崎のいろいろな場所に
植え始めました。
そして　植えるたびに
「命ってすごいなぁ」
と思いを巡らせました。

▲ この絵の裏に貼る

7

そんなある日
じゅもく先生のことを聞いて
絵を描いているおにいさんが　やってきました。

（おにいさん）
「じゅもく先生。
先生はスゴイですよ。
僕にも何かやらせて下さい」

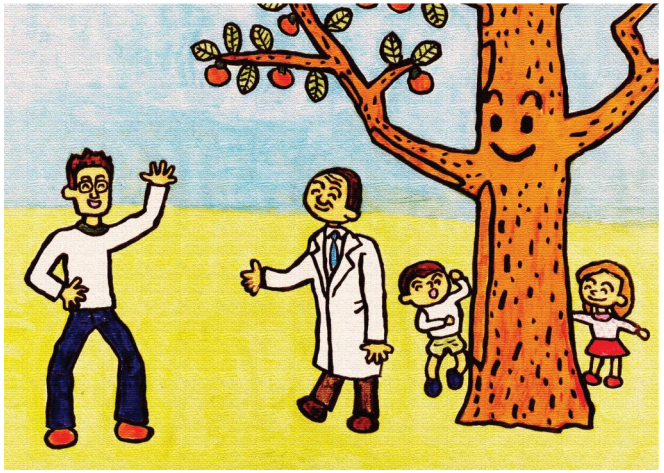
（じゅもく先生）
「それは嬉しいですねぇ。
でも・・一体何をするんですか？」

（おにいさん）
「いいアイデアがあるんです。
柿の木赤ちゃんを植える時に
みんなで絵を描いたり
歌ったり　踊ったりする
というのはどうですか？」

（柿の木）
「ああ　それは楽しそうですね。
でも　おにいさん一人では
できないでしょう？」

（おにいさん）
「だいじょうぶです。
きっと　たくさんの友達が集まってきます」

こうして「柿の木ともだち」
と名付けられた仲間達は
柿の木赤ちゃんを　長崎だけでなく
日本全国に届けることにしました。



▲ この絵の裏に貼る

8

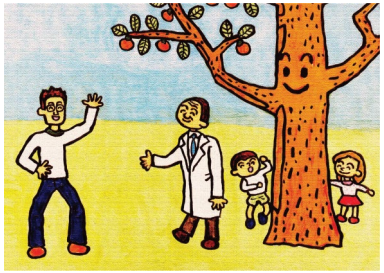
（おにいさん）
「ここにいるのが
柿の木のあかちゃんだよ。
植える前に　みんなで一緒に
柿の木の絵を　かいてみようよ」

♪
かいてみよー　かいてみよー
今の気持ちを　かいてみよー
かいてみよー　かいてみよー
柿の気持ちを　かいてみよー

子どもも大人も
柿の木赤ちゃんのことを
よく見ました。
長崎の柿の木のことも
じっと考えました。

（おにいさん）
「みんな心の中でも
柿の木赤ちゃんを育ててみて
くださいね」

♪
かいてみよー　かいてみよー
今の気持ちを　かいてみよー
かいてみよー　かいてみよー
柿の気持ちを　かいてみよー



▲ この絵の裏に貼る

9

さあ　いよいよ
柿の木赤ちゃんを
植える時が来ました。

子ども達ひとりひとりも
そっと土をかけてあげます。

そして柿の木赤ちゃんと
みんなは
１０年後の
同じ日　同じ時間に
また　ここで会う約束を
しました。

そのうちに
いろいろな国の人達が
柿の木赤ちゃんに
会いたがるようになりました。

▲ この絵の裏に貼る

10

そこで　じゅもく先生や
おにいさんは
柿の木赤ちゃんを
世界中の子供達に
届けることにしました。

外国に行っても
絵を描いたり
歌ったり　踊ったりします。

どの場所に植えられた
柿の木赤ちゃんも
１０年後の
同じ日　同じ時間に
みんなで会う約束をしました。

▲ この絵の裏に貼る

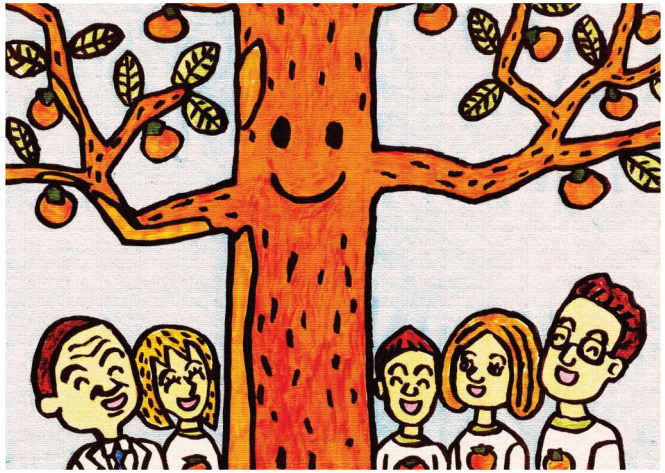
11

さて　ここ長崎の
柿の木のまわりには
たくさんの「柿の木ともだち」が
集まっています。

（じゅもく先生）
「柿の木さん　柿の木さん。
柿の木さんと
柿の木赤ちゃんのおかげで
たくさんの友達が
できましたよ」

（おにいさん）
「そうですよ。
世界中の子供たちが
柿の木赤ちゃんと
遊んでいるんですよ」

それから
柿の木ともだちは
感謝の気持ちを込めて
ふわっと



▲ この絵の裏に貼る

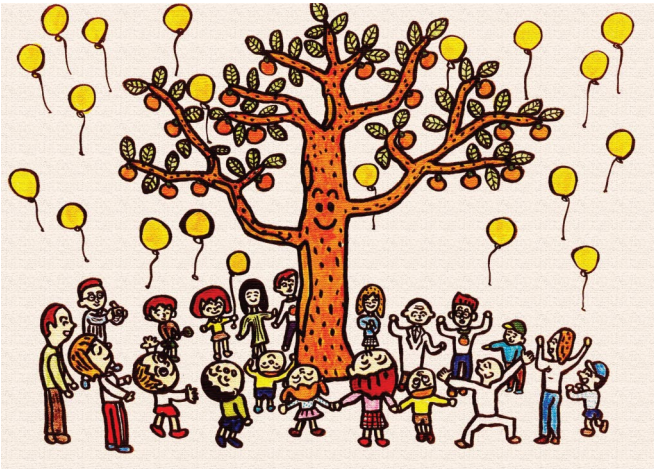
風船を　空に
うかべました。

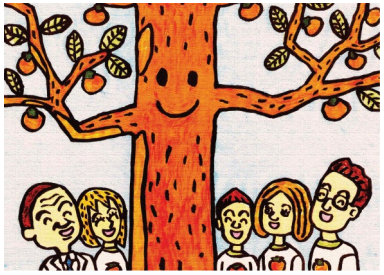
（柿の木）
「みなさん
わたくしの子供たちを
いろいろな場所で
実らせてくれて
ありがとうございます。
親にとって
こんな幸せなことはありません」

原子爆弾を受けてしまった
柿の木でしたが
今ではたくさんのともだちがいます。

そして　やって来たともだち
一人一人と
色々なことを話すのが
何よりの楽しみなのです。

おしまい





▲ この絵の裏に貼る

## 執筆者紹介

# 木谷 安憲（きだに あんけん）

1963年石川県生まれ。金沢美術工芸大学油絵科卒業。画家。
アートとコミュニケーションをテーマに
絵画作品やワークショップなどの制作活動を行っている
柿の木プロジェクトのメンバー。
ベニスや埼玉県東松山などで絵と歌のワークショップを行った。

---

この紙芝居は、2004年に神奈川県立図書館で行われた
「第5回手づくり紙芝居コンクール」一般の部で
大賞（加太こうじ賞）・童心社賞・観客賞を受賞しました。